



南極

第16号

平成15年7月17日
南極倶楽部会報

N・Nカップリング

木下是雄

「N・Nカップリング」のN・Nは、永田・西堀、あるいは西堀・永田をあらわす。カップリングは物理用語で、相互作用のある結びつき、つまり双方が相手に作用（力、影響）を及ぼし、また相手の作用（力、影響）を感じ合う関係を意味する。N・N間の相互作用はおおざっぱに言うと反発的で、南極観測開始の準備に一役買った東大山の会（スキー山岳部OBの会）の仲間が苦労したことの第一は、このN・Nカップリングであった。このことばをつくって仲間の間にはやらせたのは、たぶん私である。

N・Nカップリングの話に入る前に、背景の事情をひととおり説明しておく必要がある。

茅誠司先生（当時、学術会議会長）が、国際地球観測年（一九五七年七月～五八年十二月）の南極観測に日本も参加することを決められたのは一九五五年九月で、この決心の背後には朝日新聞社の熱意があった。地球電磁気学の永田武教授（東大）を観測関係のヘッドにすることは実質的にはそれより

前にきまっていたようだが、設営・行動のリーダーを西堀榮三郎博士にするということは、だいぶ遅くなってから（同年末？）きまったらしい。そもそも当初は、「観測隊」のなかに設営関係のちゃんとしたスタッフが必要だということを学術会議や文部省は理解していなかったのである。そのことがわかって茅先生以下が困ったあげく、日本山岳会に声をかけて、山岳会の推薦で西堀さんが登場した - というのが実情のようだ。

一方で、東大山の会の鳥居鉄也たちが永田さんに接近して、山の会が観測隊の設営面を担当して南極に押し出そうと動きはじめていた。鳥居のほかに私と年代の村山雅美、朝比奈菊雄などを主力とするこのグループを、かりに「山の会南極グループ」と呼んでおこう。私も彼らに声をかけられたが、私は南極に行く気はなかったので、この仲間にまきこまれないようにしていた（のちに私は、一次隊の出航直前にアメリカ隊にオブザーヴァーとして派遣されることになったが、これは私の知らないところで話がきまったことで、否も応もなかったのである）。

年が明けると山の会南極グループの動きは活発になり、設営・行動の主導権をとる形になってきた。五六年三月の一次隊南極訓練合宿は、このグループのリーダーシップでおこなわれたものである。私もこの合宿にコーチの一人として使われたが、その前後から、永田さんにアプローチされたこともあって、私の南極へのかかわり方は急速に深まっていった。

永田さんは、思いもかけず一くせも二くせもある山の連中とつき合わされることになったものの、世界が違いすぎて話が通じないので閉口していたらしい。そのときに、たまたま山の会のなかに自分の五年あとに同じ物理教室を出た私がいることを発見して、この男なら自分の言うことが通じるか、と接近してきたのだと思う。事実、物理屋の世界と山屋の世界との両棲類の私には、永田さんの気持も山の会南極グループの考えもよくわかった。

インターリーダー
「通訳」として私が間に入ると、いろいろの話がまとまりはじめることが多かった。

しかしこれは永田さんと山の会南極グループとの間のことで、西堀さんと永田さんとの間となると話ははるかにむずかしかった。

西堀さんは京都学士山岳会(AACK、京大旅行部OBの会)の創設者の一人で、年齢が永田さんより十ぐらい上だ。山の会南極グループの連中は自分たち

の大学の教授である永田さんに一目置いていたけれども、西堀さんは永田さんに遠慮する理由がない。しかも、西堀さんは南極に関心を抱いて以来何十年、文献も読みあさっているし、在米時代には南極関係者を訪ね歩いて「いつかは自分も南極へ」という夢をあたためてきた人である。こと南極行きに関しては自分の右に出る者なしという自負があった(当時、極地行の知識で西堀さんに比肩する人は加納一郎さんだけだったろう)。

その西堀さんの^{オペレーション}行動計画に関する構想は、後述のように、観測グループ・学会会議・文部省の線の考えと全く違っていた。西堀さんが次々に自分の考えをぶつけてくるのに、永田さんは納得できない。その永田さんもまた強い人で、天体としての地球の極をとりまく事象の理解に関しては自分がトップという自信がある。また、それまでに大きな観測計画にいくつか関与してきたという自負があり、調査のために山野を跋涉した実績もある。簡単には自説を曲げない。……こうしてN・Nカップリングが火花を散らし、その余波が山の会南極グループに及んでくるのであった。この頃にはこのグループが、オペレーションについての永田さんの相談相手になり、同時に不満のはけ口にもなっていたのである。

二人の意見がことごとく違った根本の原因は、西堀さんは未知の地に

足を踏み入れるのが生き甲斐でそのためには苦勞をいとわぬ「山屋」として生きてきたのに対して、永田さんはこれとは無縁の世界の住人であったという点にある。しかし、それ以外にもいくつかの理由があった。

永田さんは、みずから認めていたとおり「官僚」で、予算と会議で積み上げていく方式が身についていた。これに対して西堀さんは形式尊重フォームリテューをきらい、「いい」と思ったら手続きは無視して突き進む人だった。西堀流の真骨頂は、一九五二年に、機をとらえて単身ネパールに入って国王や高官に接触し、マナスル試登の許可をとりつけた行動に端的にあらわれている。芯は強いのに当たりがやわらかく、社交上手なので、ネパールでは大人気だったらしい。永田さんにはこんな真似はできない。しかし、いくつかの大型プロジェクトで役所と接触してきたためだろう、文部省その他にちゃんとした人脈があり、自分の考えが通るように役所を動かしていく腕前は確かであった。

二人の反りが合わなかった一因として、「東京と京都」という要素も挙げておくべきかもしれない。これは、私も含めた山の会南極グループと西堀さんとの間の問題でもあった。東京と京都というのは東大と京大との対抗意識の意味ではない。そういうものが全然なかったと言ったらウソになるかと思うが、それはきわめて稀薄で、問題にな

らなかった。しかし、(西堀さんも含めた)京都の人たちの屈折したものの言い方は、しばしば、私たち単純素朴な東夷あづまえひすに「とてもかなわない」と嘆声をあげさせた。そのたびに私は「これが京都千年の文化の厚みか」と舌を巻いたものだ。N・Nカップリングの底流として、永田さんの側に「西堀さんの言うことは字義どおりには受けとれない」という警戒心があったことはまず間違いなからう。

いま東大と京大ということに触れたが、西堀さんは設営・行動のリーダーときまって早々に、東大山の会で私の三年上の渡辺兵力に声をかけてアシスタントとしていた(東オングル島に昭和基地設営の場所をみつけたのは兵力である)。会ったことのない兵力にどうして白羽の矢を立てたのか。谷川岳開拓期の活躍その他の山歴が西堀さんの目を惹いたのか。AACKの加藤泰安(東京在住)あたりの推輓があったのか。とにかくこの時期、渡辺兵力は山の会南極グループとはつながりがなく、西堀さんの側にいた。

私は、たしか一九五六年の六月はじめに、グループの意を受けて「話をつけに」渡辺家を訪問し、数言で互いの意が通じ合ってしまった、それが今に至る彼との親交の契機となったのをおぼえている。

兵力が西堀さんに協力していた一方では、AACKの伊藤洋平が五六年のは

じめから山の会南極グループに加わって活動していた。洋平（私には旧知）がグループに入ってきた経緯は記憶にないが、これも背後に西堀さんの意図がはたらいていたのかもしれない。

前に、「西堀さんの^{オペレーション}行動計画に関する構想は、観測グループ・学会会議・文部省の線の考えと全く違っていた」と書いた。いちばんのポイントは、西堀さんは一九五六～五七年の第一次の南極行き - 予備観測と呼ばれていた - で越冬隊を残してくることを主張したが、観測グループ・学会会議・文部省側（以下文部省側と略称）は、第一次では現地を見てくるだけにして五七～五八年の第二次 - 本観測 - のときにはじめて三十人規模の越冬観測隊を送りこむ、という考えを譲らなかった点だ。このほかに、犬ゾリの使用、氷海における^{氷先案内}の問題その他、両者の意見が合わないことは数々あったが、それらはいわば副次的なことである。

初年度越冬という西堀構想は、常に未踏の地に足跡を印す望みに駆られて山のぼりの体験を積んできた山屋の考えだ。これに対して文部省案は、そういう経験のない人たちの「常識的」な判断にもとづくもの、もっとどぎつく言えば机上のプランである。当時、文部省側では、地球観測年のための南極行きに「探検」の名を冠せられることを神経質にきらっていた。その気持は

私にも理解できるものだったが、気象も不明、氷状も不明のリュツォウホルム湾に侵入して基地をつくる仕事は探検以外のなにものでもない。ヴェテラソの山屋の西堀さんの考えこそが現実的で、文部省側の計画は砂上の楼閣だったのである。

私はそれまで、西堀さんが次々に提示するオペレーションの案に対して何度か批判的な立場に立った。私の無知がそうさせた場合もあり、私のほうが観測グループの心情を知っていたためにそうなった場合もあり、また西堀さんの提案が単なる思いつきにすぎなかった場合もあったと思う。しかし、私も山屋の端くれだから、もし第二次のときに相当規模の越冬観測隊を送りこむのならば、ぜひとも第一次で少数精鋭の越冬隊を残して現地で何が起こるかを体験しなければならぬという点では、西堀さんと全く同意見であった。

だが、この意見を文部省側に理解させることは容易でなかった。私は、最も可能性があるのは、物理学者仲間である永田さんに、物理学者仲間にはいちばんよく通じるストレート・トークでぶつかることだと考えた。それには、山のぼりや探検のやり方（^{タクティクス}戦術）とその背景をある程度解説しておく必要がある。私は永田さんと同席するたびに小出しにそういう話題を出していった。そしてある日、意を決して東大・地球物理学教室の永田さんの居室に乗

りこんで、当面の越冬問題に対する山屋としていちばん「自然な」考えを簡潔に話し、自分は西堀構想が最も^{フラクティカル}実際のだと信じると言った。永田さんは案外あっさり「そうか」とうなずいた。それから、N・N カップリングのいちばん解き難かったもつれが緩みはじめたのである。

後記

後年、私は西堀さんや美保子夫人とのしくおつき合いさせていただいたが、一次隊の準備期には、私と西堀さんとの直接、間接の交渉（交渉は間接の場合が多かった）はいつも^{テンション}緊張をともなうものであった。あえてその時期のことを書いたのは、西堀さんに関する「記録」としてこれも残しておくべき話と考えたからである。

「たのしい」おつき合いがはじまったきっかけは、西堀さんの三男の峰夫君を大学四年から大学院博士課程にかけて私の研究室にお預りするようになったことである。彼はいま、自営の真空技術者としてドイツを根城に欧州で活躍している。

（学習院大学名誉教授・第一次南極地域観測隊と同時期に、日本学術会議からのオブザーヴァーとして米国ウェデル海隊に参加）

西堀栄三郎全集別巻 「人生にロマンを求めて 西堀栄三郎追悼」 悠々社 1991年

永田さんがシンガポールで怒るわけ 村山雅美

何につけても一番でなくてはならないことを身上にした永田さん。その永田さんはことシンガポールの地誌とくに風俗誌については僕が一番だったことが癪の種。何が癪にさわらせたのかはつぎのとおりである。

昭和 19 年頃のことだ。僕は航空母艦に乗っていた。母艦が何より欲しいのは新品の飛行機と燃料。本土からトラック島の基地までの海路空路とも太平洋もすでに危ないため飛行機の補給は郵船・商船の高速客船を改装した中型空母によるシンガポール経由だし、燃料潤滑油の補給は無論シンガポールがらみだった。こんなことなら前進基地をそこへ移すかと準備も本気だったので耳学問と共に余沢としてタンターからの差し入れのスコッチやウェストミンスターにもありついた。戦後、繊維の商売に携わっていた時、シンガポール事情をミドルストリートに越後屋なる大店を戦前からはっていた福田庫八氏から聞いていた。彼は商売人ながら戦時中は諜報の千田機関の要人でもあった。昭和 28 年マナスル遠征の帰路、単身カルカッタから登山隊の荷物を運ぶ貨物船でそこに寄港し風俗誌の収集の機会にも恵まれた。そんな因縁から宗谷の入港時には必ず永田さんを外してアサヒナ（朝比奈菊雄）、トリイ（鳥居鉄也）、ハラダ（原田美道）、シ

ミケン(清水賢二)、ヨッペイ(伊藤洋平)などとまずメイフェアのバアに始まる愉快的な上陸が永田先生の癩にさわらない訳がないわけである。(3次冬・副隊長)

明治の人はエラかった

村山雅美

白瀬南極探検隊は開南丸に樺太犬 30 頭を積んでいた。可哀想に暑さ、狭さ、サナダ虫などで次々と船上で斃死していった。白瀬隊は「樺水」「南進」「北来」などと諷(いみな)を付けてねんごろに水葬した。南極圏に到達した明治 44 年 3 月 3 日には太郎・次郎の二頭だけになり、3 月 27 日には太郎一匹になった。3 次隊が再会したのもタロ・ジロ、4 次隊でジロが死に、6 次でタロが帰って来たのも不思議な因縁だ。

白瀬が樺太犬を樺太の富内村近隣から購入したとき警察からアイヌがつき添って東京迄送るように通達されていた。誰がこの大型犬を使えるのかと孤児を育てるのは同族の義務とされていたアイヌの社会に生きてきた山辺安之助はいっそのこと南極迄行って犬の面倒みをと志願した。花守信吉を仲間に南極でのたいした働きぶりに頭を下げた。彼は日露戦争時の功績としてアイヌでは初めての勲 8 等瑞宝章に叙せられ、行賞賜金 70 円を富内村に寄付す

るなど金田一京助博士をも感動させたアイヌ社会への貢献に尽くした人物だった。

参照：「白瀬隊と二人の樺太アイヌ」(佐藤忠悦 白瀬南極探検隊記念館)(3次冬・副隊長)

第 3 次 南極駕籠屋 インド洋の巻

三田安則

第 3 次の資料の中から赤茶けた紙片 8 枚が出て来ました。鉛筆書きの赤道祭出演の脚本でした。本誌第 7 号の「短編」第 2 弾の様な気がして逡巡?しました。

第 3 次行働、赤道祭的一幕。

「裸の山下清」第 1 次・三田は衣装の要らない裸の山下清画伯に扮して赤道祭に参加。三席に入選。シンガポール出港後 4 日間で、堅いラワン材を削って、下駄を作った苦勞が思い出される。

「いざり勝五郎」第 2 次・山下・溝口(航海)の二人が、赤坂の芸者衆に手解きを受けた名演技を披露した。三田は当直で不参加。

「弁天様が居ようとは...」今は昔の話し... 半世紀昔の話し・もう時効。

先樺雲助 三公(三田安則・航海)

後樺雲助 山公(山下 巨・航海)

駕籠 (プロトンを引っ張り出てくる)

エッホ エッホ エッホ

エッホ・・・
三公 マグネの観測とやらはどうで
いー
山公 故障続きで駄目さ
三公 それじゃーサッサと揚げちまい
な、重くて船も走れねーや
山公 それにしても この塩よっぱい
川は巨けーなー
三公 早えーもんだ 思えば矢張り
2年前の今頃 越中富山の山男
や、裸の山下清さん。ユーラリ・
ユラユラ揺られて ここを通っ
たとか聞いたが・・・
山公 イヤイヤ 去年はチート早かつ
たそうだが、イザリの勝っあん
勝五郎さんが、イザリの体に鞭
打って南極迄もおいでなさった
とか...
三公 その後何にもニュースはねえー
かい、ラジオはどうでいー
山公 (レシーバーを掛ける・・・)
チェッ 全然駄目じゃ 又電離
層とかのガリガリじゃ 仕方が
ねえー
三公 ラジオが駄目なら天気予報も判
らんじゃろー
山公 そうだラジオゾンデちゅーもん
揚げれば天気は判る？
ゾンデを放す
三公 どっち行った？
山公 あっち行った・・・
三公 あー あっちか それなら天気
じゃ

山公 お天気予報なんてそんなもんじ
ゃろなー
三公 うんだ うんだ 山男やら裸
の大将やら、イザリの勝っあん
などご先祖様に負けまいと・・・
山公 街道筋で鍛えたこの足、パドル
・クラック乗越えて昭和基地で
まっしぐらと やっとここまで
来たけれど... 駕籠が重うて
(水を飲む)
どうでえー 一杯
三公 オッ こりゃー水じゃーねーか、
酒は浴びる程飲んでも良かんべ
が 水はあれ程 節約せーと言
うとるじゃろ、以後 気をつけ
ろ
観衆 (隊員・乗組員) ~ ~ 駕籠の中は
なんだなんだー
(がやがやがや...)
三公 オット 聞かれて言うもおこが
ましいが・・・
山公 灘弘、茅誠、鳥辰の 親分衆よ
りー・・・
三公 夢々 シコルスキーやら雪上車
に 乗せるでないぞ
山公 汚ねー二人のこの駕籠で 必ず
運んでくれと頼まれた この荷
物
三公 お見せしたいは山々なれど、見
せりゃ皆の癪の種
山公 されど海王様に 一目お見せし
なけりゃこの赤道
三公 通して呉れねーこったろー

山公 お見せするにゃーするけれど...

それっ 垂れを揚げてなかの*

三公 弁天様が居ようとは *弁天様
を御開帳

三・山 海王様でも 御存知あるめー
チュッ

海王・観衆一同 (拍手喝采 眼の保養)

無事赤道通過の巻、一幕の終わり

第1次「宗谷」には弁天様が二体祭られていた。どなたの御配慮かは今もって知らない。上陸成功、昭和基地建設、越冬隊成立。弁天様の御利益をお分けする意味で、一体は昭和基地へ遷座した。航行安全と無病息災の守り神「宗谷神社」は、昭和31年11月21日、鎮座祭が執り行なわれ、爾来半世紀に渡って「宗谷」を守り続けている。

弁天様の方は昇天されたのか遷座されたのか、杳としてその行方は不明。御加護を賜った奇々な方、行方を多少なりとも御存知の方があれば、私・三田に御一報頂ければ幸甚。50年史編纂の一助ともなればと思うが故。(1~5次宗谷・航海)

南極とコケ、そして十勝

神田啓史

十勝を離れてから、かれこれ35年になります。私の生まれは音更おとふけです。生まれてから、小・中・高、そして大学まで、全部十勝でした。音更にはそ

の昔のアイヌ文化の面影が沢山ありました。たしか小学校の校歌が「コタンの昔しのばれる音更川の水清き....」。その後転校した小学校は3つの教室しかない複式学級で、先生も4人だけでした。周りの自然は素晴らしく、北に大雪山系、西に日高山脈が連なり、夕日が沈む頃のピハイ口岳の稜線のシルエットは今でも目に焼きついています。この小学校の校歌は「北に見えるはヌプカウシ、今日もはるかにそびえたつ.....」。大雪山の十勝側は東大雪とか裏大雪とかいいますが、その玄関口に東ヌプカウシ、西ヌプカウシが立ちほだかり、その雄姿を遠方に眺めながらの小学校生活でした。3年生から中学に入るあたりの5年間はおそらく今日の私に大いに影響しているのではないかと思います。根っからの収集癖は依然として顕在で、アイヌの鎌や壺の欠片、古切手、古銭、昆虫、雑品、これらの収集した宝物を密かに眺めるのが私の楽しみでした。私が5年生の時は、国際地球観測年事業の一環として、1957年1月に第1次南極観測隊がオングル島に日の丸をあげた年でした。そしてその年の10月には旧ソ連のスプートニクが世界で初めて人工衛星を宇宙に打ち上げた年でもありました。その時はスプートニクの新聞記事、衛星のスケッチを書き溜めて長い絵巻物にして冬休みの宿題にしたことを覚えています。ただ、なぜか南極観測隊の快挙の

記憶は鮮明ではなく、その2年後のタロ・ジロが昭和基地に生きていたというニュースでさえも私の記憶にはあまり残っていないのです。

中学一年の秋の遠足の日でした。やまぶどうやらコクワ採りに仲間がわいわいやっているうちに、私は何か珍しいものがないかと相変わらず地面を物色していたのですが、そのとき思わず声を上げて見つけたものがありました。それは「^{ツクシ}蛇苔」というコケの仲間でした。その名のごとく緑に白黒の縞模様のある大蛇が林床をうねっているような気味の悪いものでした。子供心に背筋がぞーとするほどのものでしたが、好奇心と収集癖からそれを手にとって触れてみたいと思い、恐る恐る採集したのです。今思えば、これが私の収集癖をさらに輪をかけて広げてしまった契機となったようです。

地元の大学に進んで、大いに学生生活を満足したのですが、将来、獣医・畜産系の専門家になるという心の準備ができず、むしろ4年間、山を闊歩しているうちに調べたヒカリゴケの生態に興味を沸き、私はそれを卒業論文の課題にしようとしたらんだのです。これには大学としてはかなり抵抗があったようです。これは意外なことでしたが、この大学でやはり少年の頃にコケを収集して大事に持ち歩いていたとい

う二人の学生にめぐり合いました。彼らと意気投合して、自信を持って卒業論文に取り組んだものでした。実は最終的に私の卒業論文の課題を認めてくれた指導教官は第4次南極観測隊に参加した芳賀良一教授でした。ヤチネズミやナキウサギなどの野生動物の生態が専門で、南極でアザラシやペンギンの研究に参加したのですが、タロ・ジロなどのカラフト犬の世話もされた方でした。先生は学生に南極の映画を見せ、南極の生物の講義をされたようでしたが、これまたあまり印象に残っていませんでした。その後、私はコケ植物研究のメッカといわれていた広島大学の大学院に進むことになりました。しかし、大学の学部を卒業するあたりから大学紛争が激しさを増し、広島大学の大学院も然りで、10月までは大学封鎖となりました。卒業論文で使ったヒカリゴケの培養株を死なせたくないという思いで、占拠していた学生の厳しい尋問に答えながらやっと研究室に入る許可をもらうという有様でした。6年間の院生生活もやはり山歩きでした。大学の休みになると大雪山、日高山脈、そして帯広に舞い戻り、十勝を満喫することもたびたびでした。その帰りに立ち寄った北大植物園ではタロに出会いましたが、私はタロに確かに触れた一瞬を

しっかりとカメラに収めていました
(写真)。今では貴重な写真の一枚です。



タロとの出会い(昭和44年8月、北大植物園にて)

大学院を終えるころ、そろそろ北海道にでも就職がないだろうかと思っていたあたりに、国立極地研究所というところから助手でこないかという話がありました。それから約27年がたちました。その間、南極に6回(うち越冬2回)、北極に10回ほど出かけました。通算すると南極に5年、北極に1年ぐらいは住込んだことになるでしょうか。コケの研究と南極観測の双方を、今ではすっかり融合させてしまいました。これも十勝の寛容さがなした業なのかもしれません。私の心の中の十勝は大雪山と日高山脈に囲まれた豊かな自然そのものです。今も変わらないでほしいと切に願っています。(19夏、24冬、29冬、37夏、45夏隊長)

会務連絡

南極倶楽部会員の皆様、例会幹事の世役を前任者、山岸久雄氏から引き受け

た会員番号58番の神山孝吉と申します。今年11月山岸氏が越冬隊長として南極に出発するにあたり今年3月末に越冬から帰国した神山が、引き続いて運営に尽力していくことになりました。まだ理解できていないことも多いのですが、戸惑いながらも幹事世話人の任務を遂行していきたいと考えております。村山雅美会長の下、南極倶楽部が有意義な情報交換・語らいの場となるよう努力していきたいと思っておりますので、皆様のご指導・ご鞭撻よろしくお願いたします。

なお南極での生活も生々しい帰国の「しらせ」の中に最近の南極倶楽部機関紙が届けられており、昔の秘話などを楽しく拝見し、今では全く考えられないことなど大変参考になりました。一年間よろしくお願いたします。

例会幹事世話人 神山孝吉

連絡先 Tel 03-3962-4702

e-mail: kamiyama@pmg.nipr.ac.jp

編集後記

今年も早や7月に入り、鬱陶しい夏がやってきましたが、皆さんお元気でしょうか。6月22日には恒例の河口湖でのミッドウインター祭が行われました。小島隊長他第44次越冬隊も元気な様子です。本号は木下是雄氏の興味深い作品を、本人の許可を得て本誌に掲載させていただきました。

神田啓史 国立極地研究所

〒173-8515 東京都板橋区加賀 1-9-10

Tel 03-3962-4761, Fax 03-3962-1525

e-mail: hkanda@nipr.ac.jp